



『北九州市若松洞海湾における船上生活者の歴史的変容 —オーラルヒストリーからのアプローチ—』を刊行して

田上 繁
(非文字資料研究センター 研究員)

1 本書のねらい

本書は、「はじめに」で記しているように、長い日本の歴史の中で決して記憶されることも、記録されることもない、ほんの芥子粒みたいな短い期間にただ頭をもたげる人たち、船上生活者たちの生きざまをつづったものである。研究対象としたのは、明治中期（1890年ごろ）から昭和40年代（1970年前後）までの約80年間、筑豊炭鉱の興隆にともない、石炭の集散地として発達した北九州市若松洞海湾の船上生活者たちの歴史である。

九州の北東端に位置する若松（現北九州市若松区）の港は、最盛期には数千艘もの大小の船舶で埋め尽くされていた。そのため、対岸の戸畑や八幡の町は若松から見渡せなかったという。ところが、現在では往時の若松港の賑わいはすっかり影を潜め、湾内に碇泊する船舶は、ごくわずかな貨物船と沿岸に繫留する海上保安庁の船ばかりである。このように洞海湾の景観は一変してしまった。小さな漁村にすぎなかった若松が、筑豊地方の石炭産業の展開とともに港湾輸送において急成長をとげ、わが国の近代化の一端を担う役割を果たしたこと、反対に、その後のエネルギー産業の転換、船舶の大型化、陸上輸

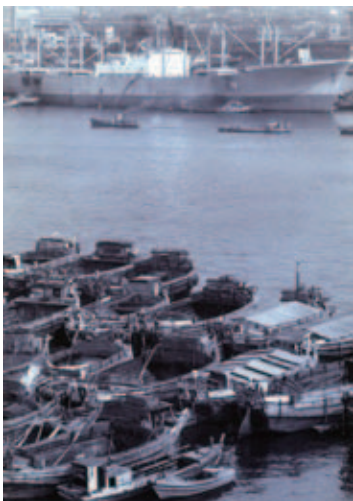


写真1 ハシケの群れ

送の展開、近代的施設を備えた近隣港湾の発展などの理由により、瞬間に衰退していった歴史を追求することは、明治以降の近代化の問題を考える上でも、きわめて意義のあることと考えられる。ところで、本書では、専ら文献資料に依拠していた

従来の研究方法を乗り越え、非文字資料の一つである船上生活を実際に体験した人々からの聞き書きや、洞海湾の船上生活者に関する写真資料などを利用する分析方法を採用した。幸い船上生活を体験された方たちや、荷役会社、港運会社、造船会社、船食会社の経営者、さらには、子供たちが寄宿舎生活を送る若松児童ホームで指導にあられた先生方からも貴重なお話をうかがう機会をえた。こうしたライフヒストリーとともに、若松図書館を始め個人が所蔵されている貴重な写真も収集、活用することができた。



写真2 聞き書きの様相

本書は、第1部 論文編、第2部 資料編の二部構成となっており、さらに、第2部 資料編は、オーラルヒストリーと写真資料に分けられる。第1部 論文編は、「はじめに」「おわりに」と本論5章からなり、それぞれが全体的に関連性は持ちながらも、各章が独立した内容を有している。各章の結論を先取りするならば、以下のようになろう。

第1章の「洞海湾の変遷と港湾輸送」では、ハシケの生活者が身につけた、忘れ去られようとする技術の話や、荷役作業の時に海に落ちた「カイボタン」や「ニゴタン」（荷後炭。本書中では「二号炭」としたが、「荷後炭」と解釈した方が妥当であろう）という石炭拾いの話、北樺太から沖縄まで渡り歩くアンコ労働者、任侠道を身にまとう「ゴンゾウ」、文学・詩を志す「ゴンゾウ」

などの話を通して、多彩な船上生活者と港湾荷役労働者像が浮き彫りとなった。

第2章の「洞海湾若松港における船舶輸送」では、船大工から機帆船修理に生涯をかけた話、輸送用の小さな機帆船で、玄界灘の荒波を対馬に渡る船上生活者の話から、嵐の瀬戸内海をレーダーのない時代、頭に叩き込んだ海図と灯台だけを頼りに乗り切る機帆船夫婦のたくましが、よみがえる。

第3章の「洞海湾若松港における港湾荷役業」では、「ゴンゾウ」の船への石炭運搬の職人的技術、熟練技を習得した「ゴンゾウ」の技術伝習と賃金の決定構造など、仲仕の生々しい労働実態が聞き書きから伝わってくる。

第4章の「船上生活者の暮らし」では、船上で炊事する主婦の肩にとまる微笑ましい伝書鳩の写真から、緊急連絡を必要とする船上生活者の厳しさが伝わる。また船上生活の水の貴重さ、「ウロさん」といわれる日用雑貨を伝馬船で売り回る海上商人が、船上生活者を支えたこと。さらに大手の日本郵船、大阪商船、山下汽船などの食料を大量に販売する「船食」業者の活躍など、従来の歴史では記録されることのない、海の生活者の実像がいきいきと描かれる。

第5章の「船上生活と子供たち」では、揺れる船上で熱湯をかぶり火傷する子供たち、船上で遊ぶ子供たちの姿や海に落ちて亡くなる子供たちの悲劇が胸に迫る。このような船上生活の子供たちを船上の危険から救い、義務教育を継続させるため、陸上の寄宿舍・若松児童ホームを設置し、それによる船上生活の両親との別れなど、近代化は子供たちの生活にも大きな変化をもたらした。さらに児童ホームで寄宿舍生活を送る子供たちを懸命に支える保育士の活動が、今はじめて語られる。

以上、これら貴重なそれぞれの体験談は、忘れ去られつつあるかつて洞海湾若松港で暮らした人々の多様な生きざまを、現在に伝えている。

2 オーラルヒストリーと写真資料からしか見えてこないもの

文献資料に限界があり、あるいは、文献資料そのものが伝存しないといった事態においては、非文字資料の重要性が一段と増してくる。本書でも文献資料では解明できない、つまり、非文字資料でしか解明しえない歴史事象がいくつもある。そこで、いくつか事例を挙げて確認してみよう。

①みんなで遊んで、父がご飯食べるときに、5人兄弟だったんですね。で、こう頭数数えて、「1人

足りん」ちて、……船と船がこうぶつかって、傷が付かんように、ペンドルっていってですね。タイヤのようなこう板がね。そのペンドルの、こうチェーンがあるでしょう、大きな。それをトモ（艫）からオモテに来よって、これにつまずいて、海に落ちたんですよね。……もの凄いその弟を可愛がってくれとったおいちゃんが、もう、みんなが通った後に通って、その人に引っかかって来たんですよね。[元船上生活者 渋田幸子さん。本書 p.79～80]

①のように、船上生活を送った話者3名の3名ともが、弟や妹を船上での事故で失っている。辛い過去の出来事であるが、いずれも涙ながらに語っていただいた。

②海上の生活の人がみんなね、子供が海に落ち込んだり、学校に行かれんとか、そういうのを考えられて、こういうとこの施設に預けて、土曜、日曜日に帰って、ほして、船に帰るちゅう。だから、わたし来たとき何人か子供おりましたけど、「船に帰る」ちいいよったですね。……やっぱりいろいろ問題があったんですよね。そのときね、双子がおりましたですね。……1人の子は、双子の1人はですね、全部丸はげで。そして、火傷のケドロ（ケロイド）のあれですから、つるつるでしょ、皮が。……船が燃えて、火事だったですね、船底が。そのときに2人の子供が這い上がって来たち、やっぱり生命力が強かったんでしょね。やっぱりまだ生きていかな使命もあったでしょう。2人が這い上がって来て、助かったんです。[元保育士 中井陽子さん。p.109]

③やっぱり帰りたいから、(栈橋から)大きな声で「おーい」って、船の名前呼んで、「おーい」っちいわないけん、もう、聞こえないですよ、小さいから。「おーっい」て、仕舞いには、もう4回ぐらい呼んでも、全然分らないから。もう、わたし帰るっちゅって(笑う)、帰りよった。……だから、食事を、もう(船に)帰るときは、「食事要らないから」っちゅって帰るんですよ。(児童ホームに戻って来て)「すみません」っちゅって。(炊事の方が)「もうないから」って。仕方がないから、「なんか余ってるのがあるから、それでなんか作ってあげるね」って、材料の余ったのでなんか作ってもらったりして。[元船上生活者 田上キサ子さん。p.82～84]

④子供もAからZまでおりますから。全部取り方が



違いますから。おなじことであって子供が分かる訳ないんですから。やっぱり、そのケースバイケースで話してあげないと。そこが一番むずかしいですから、特に、船の関係ではご父兄がおられますからね。やっぱり三位一体、わたしゃあよく三位一体というんですけど。「子供とそれからご父兄の方と職員との連携がやっぱりうまくいってないと、三位一体は崩れるよ」と、職員によくいってましたけどね。[元保育士 佐々木偉昇さん・和代さんご夫妻。p.122]



写真3 若松児童ホームの絵

②・③・④は、若松児童ホームで寄宿舎生活を送る船上生活者たちのエピソードと、指導にあたる保育士の教育のあり方を知ることのできる話である。いずれも先生たちの子供たちに向けた眼差しの優しさがひしひしと伝わってくる。

⑤箱にですね、箱にちょっと穴みたいなんがあって、これが海に落ちて行く。これが、高月（石橋英子さんの旧姓）のおばちゃんが炊事しよるところと思うんですよ。……（居間は）ないです、上には。そやけ、上と1部屋あるんですよ。ご飯食べたり。で、横にちょっとお風呂があるんですよ。それからちょっとこう、中にちょっとカマクラみたいなね、いうたら、そういうところに、トン、トンと4、5段降りて、また、階段を上がる。そこで寝る。[元船上生活者 洪田幸子さん。p.94～95]



写真4 船上の部屋でくつろぐ少女

⑥父がすごい好奇心旺盛な人だったので、沖に出たときに、いろんなトラブルなどが起こったときに、岸にその拠点を、鳩の拠点を作っててですね、連絡用にしたらいいという発想のもとに始めたんですけど。でも、結局は、鳩が実際船に棲み付いているから、外で飛ばしても、どこにも行かないんですよ。[元船上生活者 石橋英子さん。p.88]



写真5 伝書鳩を肩に乗せて炊事する母親

⑤と⑥は、いずれもハンケの部屋の位置や炊事を行う船縁の様子など、船の構造や機能を述べた話として注目される。また、伝書鳩を肩の上に乗せて炊事を行う場面が撮影されているが、この伝書鳩は緊急時に陸上与連絡を取る目的で飼っていたものである。ところが、鳩が船に棲み付いてしまったのであまり効果はなかった模様である。

⑦お父さんが買って航海に行くでしょう。……生活ができないから。それで、結局、あれやこれやら、ウロさんから買って、そして、魚とか売りに来よった。魚とかね、野菜とかも。ほいで、もう、時間があるときは、オカに上がって、宮丸の市場とかで買う。あと、急に要るときなど、結構いいのを持って来よったですよ、魚とかでも新しいのを。それをしないと、食事ができないでしょう。だから、それを仕入れて、そして、それを持って行きよった、航海に。[元船上生活者 田上キサ子さん。p.93～94]



写真6 海上商人の「ウロさん」

⑦のように、海上において伝馬船で商売を行う「ウロさん」＝沖ウロと呼ばれる海上商人がいたので、船上生活者たちは、食料を始め日用雑貨を購入することができた。長期間の航海のときも「ウロさん」から必要な日用雑貨を買い入れた。また、時間的な余裕がある場合は、陸に上がって市場で買い物をすることもあった。

⑧材木から、だから、あそこに来たのはね、なんかね。沖の彦島に持って行く石炭も持って来たった。鋼材もね。……うん。対馬から鉱石運びよった。うん。鉱石を。「こんだ、いい仕事ありますよ」ちゅうんで、材木をやめて。対馬までね、鉱石のなんかね。……うん。ダイナマイトとかなんとか積んで行きよった。[元船上生活者 越智俊充さん・頼子さんご夫妻。p.98～99]

⑧では、材木、石炭や鋼材などを運搬した話が語られる。中でも、対馬までダイナマイトを運んだ話には驚かされる。ただ、玄界灘の荒波に抗しきれず、対馬への渡航は1年程でやめることになった。ご夫妻が口を揃えて、厳しい航海の様子を語っていたことが印象的であった。

⑨（ゴンゾウは）もちろん地元の人もいらっしゃるんですよ。地元の人が大半なんですけど、犯罪を犯して、この町に流れ込んで。要するに、時効になるまで姿を隠してるとかね。そういう方たくさんいらっしゃいました。……あるいは、……わたしたちが青年のころ、「安田三兄弟」って、ボクシングの兄弟がいたんです。で、その人、長男だったんです、この人は。詩人ですね。それこそ、火野葦平さんの友だちなんです。その方が、やっぱりあの北樺太から沖縄までアンコ（大阪方面での港湾荷役労働者の名称）、アンコで歩きながら、詩をこう詠んでた。結局、若松に居ついたんです。はい。そういう方もいらっしゃいました。ええ、もうゴンゾウ、立派なゴンゾウでした。[荷役会社社長 中山弘文さん。p.136]

⑩（昭和）38年当時、（サラリーマンの）初任給がどのくらいかなあ。（こちらの労働賃金は）1万3千円くらいですか、その当時で。倍くらいですかね。倍といわん給料取ったね。もちろん、ほかでなんの保障もないんでしょ。事故があれば自分で払わないけん、保険もなにもないですからね。倍以上の

賃金払ったんじゃないかと。だから、港湾の作業に従事しようとする人は結構当時多かったです。……高倉健さんなんかも学生時代、あの人、エッセーに書かれてますよ。……（ハシケについては）われわれの場合は免許制ですから、荷役にしても沿岸荷役、本船荷役、船内荷役とか、あるいは、一般港湾運送事業で一種、二種、三種と仕事の中身によって別の事業になってるんです。ハシケは三種事業で、当時はハシケだけの免許業者も多かったですよ。港がまだ整備されていないので、全部沖荷役ですから、本船にね。だから、ハシケが不可欠なんです。……だんだん時代とともにね、荷役形態が変わってきましたからね。……ハシケ自体は自分では運行できないから、タグ・ボートに引っ張ってもらうので、結構厄介なんです。[港運会社会長 岡部秀年さん。p.143～144]



写真7 石炭荷役を行うゴンゾウたち

⑨と⑩からは、当時の時代性やゴンゾウの気質、さらには、ゴンゾウの賃金の実態など興味深い事実がうかがわれる。危険と背中合わせであっても、高額な賃金を獲得できるゴンゾウの仕事を目指して全国から多くの人たちがやって来た。その中に、学生時代の高倉健も含まれていたようである。一方、ハシケについては、荷役業務には不可欠の存在であったが、時代とともに荷役形態が変化してくると、その役割も終えることになる。とくに、1965年（昭和40）に港湾労働法が発布されて以来、ゴンゾウの立場や生活は一変するが、ハシケで船上生活を送る人たちも下船して陸に住むことを余儀なくされる。洞海湾が変貌をとげる契機となったのは疑いない。

⑪藤ノ木新棧橋から上（かみ）の方に、木造船ですよ。運び出して来よった。いわゆる「花と龍」の時代ですね。それが石炭がまったくなくなって、今度



は八幡製鉄、鉄の町、大型本船が入って来るわね。うん、八幡製鉄の製品どんどん積み出しよった。鉄の町に変わったんよ。石炭の町、洞海湾から洞海湾は鉄の町に変わった。……若戸大橋からわたし洞海湾を見下ろして見た。がらん、がらんですよ。船の姿が見えん。で、当然ね、われわれ船の病院、船のお医者さんも数が減った。[造船会社社長 稲益敏幸さん。p.149]

⑩この仕事自体(船食会社)は、戦前からあります。(昭和25年ごろは)朝鮮戦争がありよった。こっから持って行くのが近いやないですか。それで向こうで食料がとられないから、「こっちで往復分積んでいかないかん」ちゅうな感じ。……特殊な仕事ですからね。それでこれ、船は免税品とかは積めるんですよ。空港で免税品買うじゃないですか、安い。あれと一緒に免税があるんです。そやから、権利を持たんとくじやあ太刀打ちできん訳なんですよ。[船食会社社長 中野種洋さん。p.154]

⑪や⑫からは、造船所や船食会社の目を通した洞海湾の景観の変遷を思い浮かべることができる。

このように、元船上生活者を始め、荷役会社、港湾会社、造船会社、船食会社などの関係者、さらには、若松児童ホームの先生方が語る上記のような内容は、文献資料では把握することは不可能であり、オーラルヒストリーや写真資料を通してのみその実態が明らかとなる。

3 本書への反響

本書の評価については、学会での書評、元船上生活者や読者などからいただいたお手紙の文面などによってうかがい知ることができる。学会の書評では、日本オーラル・ヒストリー学会と日本民俗学会で取り上げられている。それぞれ、その一部分を引用して紹介すると、次のようになる。なお、引用に際しては、省略した部分があることを断っておきたい。

『日本オーラル・ヒストリー研究』第11号、日本オーラル・ヒストリー学会、2015年9月]

本書は、その船上生活者、港湾荷役労働者によるオーラル・ヒストリー、写真記録を通して描かれた日本民衆史である。16名の元・船上生活者たちの語りと、巻末48ページにわたって掲載された写真資料が失われた風景を蘇らせてくれる。

人情味あふれる船上生活者の家族の営みが鮮やかに

語られるが、中で印象的なのは、海に落ちた子どもの死をめぐる悲痛な思い出が、涙とともに口々に語られることである。子どもたちをその危険から救うため陸上の寄宿舎、若松児童ホームが作られた。こうした語りから、戦後日本の成長を支えた人々の歴史の一断面が立ちあがってくる。

『日本民俗学』284、日本民俗学会、2015年11月]

報告書では、港湾労働者として舢舨や機帆船を操縦し、石炭や材木、ダイナマイトを運んだ人々とその家族の暮らしに注目する。民俗資料としては、水上生活者の暮らしを記録すること自体、画期的だが、彼らと深く関わった荷役会社、港湾会社、造船会社、船食会社など周辺の人々、さらには水上生活者の子供たちを預かった児童ホームの人々への取材をすることにより、水上生活者の生活世界を立体的に描くことに成功した。

本書が生き生きと地域生活を描くことができた最大の理由は、調査の中心人物にあるのではないか。彼は若松で生まれ育ち、若松の暮らしをリアルに体験している。よそ者が調査地に出かけ、フィールドワークをしたのとは、やはり作品の迫力が違う。たとえば、調査報告書『石炭が拓いた北九州の産業と文化』(CDI、2010年)などの労作もあるが、この報告書には完敗。評者もよそ者として若松に調査に出かけるが、素直にそう思った。

両書評とも多分に過大評価がなされていると思われるが、書評の内容は、私たちの制作意図や目的を正確に捉えられている。紹介していただいた両学会には心より感謝したい。続いて、元船上生活者や読者などからの書簡をいくつか紹介してみよう。ここでも、一部省略した箇所があることを断っておきたい。

①次男坊から「凄い本が送られてきたよ！お母さんの生きた証・自分史をスタッフが著作してくれたんやね。体験した者と先生達の足と耳とで出来上がった本」と喜んでくれました。私も古稀を迎え、後何年、洞海湾の心地よい潮風を腹一杯吸い風に吹かれる事が出来るやらと思う時もありますが、精一杯楽しい日々を過ごしていこうと思っています。
[元船上生活者 渋田幸子さん]

②感謝、感動、言葉では云い表わせない気持ちで一杯です、まず第一に仏壇に供え嬉しい報告を、なぜなら、母の写真が裏表紙に出して頂いていたので真っ先に。三冊も送って頂いたので、早速読ま

せて頂きました。大学の先生につたない感想を述べるのを躊躇しますが、素晴らしい内容でとても充実していて、海上生活を送られていた人がもし読まれたなら、皆様感動すると思いました。[元船上生活者 石橋英子さん]

- ③素晴らしい研究資料の完成、皆様のご苦勞心より感謝です。船上生活を経験した方達、皆んなの喜びです。

あの分厚い資料を頂き、声を大にして、皆さんに報告させて頂きたい所ですが、……ふだん記の創始者である、橋本先生が生きていらして、この資料をご覧になったら、どれ程喜ばれたであろうと、松岡さんからお葉書届きました。すごく意義のある資料、喜びと感謝を拙い文章で表わすのはとても無理な様です。[元船上生活者 石橋英子さん]

- ④洞海湾の船上生活者の記録興味深く、知らなかった生活、消えてしまった生活をしっかりと読ませて頂きました。私自身炭礦の町・水巻に生れ、遠賀川を眺めた小学校、そして社会に住い、堀川沿いを通っての高校生活がありましたから、懐かしさも加わっているのでしょう。

ふだん記に携わり、「老人はテープレコーダーだ、昔の記憶はしっかりと残っている」と言われていた創設者の橋本義夫氏の言葉につながるものを感じています。[「ふだん記」関係者 川原洋子さん]

- ⑤早速ページを開き「まえがき」を読んでびっくりいたしました。私はこれまで歴史の解明には文献史料が唯一の方法と考えておりましたが、先生の音声の聞きとりから写真映像までを自在にとり入れる手法を拝読し感銘を深くしました。更に同級生も非文字資料の一つになっていて巾広い人脈とお人柄がしのばれる研究過程でありました。[郷土史家 千葉勝衛さん]

- ⑥此の様に膨大な資料の集積と稀少な古老からの経験談の採取で詰まった尊い御本を一通り読んで終りと云う訳には参りません。これからの私の活動の上にも何らかの形で取り入れさせて頂き度く存じます。……今回先生と研究者の皆様で上梓された、此の尊い報告書は、民俗学的な見地からも、無類な分野の生活歴史遺産として脚光を浴びるに違いないと強く信じています。近代化に労を提供

した船上生活者の人々には、軍艦島の人達とどこか似ていて、ロマンが有りたくましいですねえ。

舂のわきの小さなつり下げられた箱の下から何やら、空中で舞いながら海面に吸い込まれて行く様は、少年の心にしっかりと刻みこまれていましたが、行為者御当人方から、時を越えて実況して下さったのには、深い謎が解けた思いが致しました。

[演劇家 りゅう雅登さん]

- ⑦私もこの数年、日本の伝統的水上生活者の研究に取り組んできました。そして思うのは、関係者でない入り込みにくい部分があるな、ということです。洞海湾の報告書は田上先生の地縁・血縁あつての成果だと感じました。今後ともご教示いただければ幸いに存じます。[民俗学研究者 厚 香苗さん]

お手紙のすべてを紹介することはできないが、ライフヒストリーを語っていただいた方々、演劇の題材として取り入れることを考えている演劇家、同じ水上生活者の研究を精力的に進めている研究者など多くの方々から貴重な感想を含めたお手紙を頂戴した。現在、本書の研究成果を基礎に第2期の共同研究として東京湾の船上生活者の研究を行っており、お手紙に認められたご助言やご意見を参考にしながらさらに調査研究を推進していきたいと思っている。

最後に、本書の目的は、日本近代をエネルギー面から支えた北九州筑豊炭田の歴史を、従来の石炭産業史や炭鉱労働関係史でなく、石炭積出港として発展した若松港のハシケ・機帆船の船上生活者、さらには「ゴンゾウ」といわれた港湾荷役労働者の生活の記憶を発掘、記録することにより、近代炭鉱史の流過程に携わる人々の生活史を通して、その歴史像を豊富化することにあつた。そのために、このような史料のほとんど残らない歴史を明らかにするべく、人々の記憶の再生としてのオーラルヒストリーの方法を意識的に追求し、また図書館や個人が所有する写真資料を収集し、それらを歴史叙述に生かしたところに本書の意味があるのではなかろうか。若松洞海湾の船上生活者の歴史は、石炭輸送として日本近代産業の底辺を支えるばかりでなく、これらの船上生活の人々の生活史を通して、時代ごとの固有の歴史が一人ひとりの記憶に刻み込まれている。これが日本の近代から現在への歴史の一断面である。本書をまとめてみて、そこから、私たちは新しい近代史を再発見できると確信するに至つたのである。